

ワークショップ「文化芸術の将来像を一緒に考えませんか？」

実施報告書

多摩市では、「多摩市みんなの文化芸術条例」（令和4年4月1日施行）の第8条の規定にある通り、文化芸術に関する活動を計画的に推進するための文化芸術の振興に係る計画を策定するにあたり、その前段として、将来像（以下、将来ビジョン）を定めることとした。将来ビジョン策定に向けて、令和4年度に多摩市文化芸術ビジョン検討委員会（以下、検討委員会）を設置し、検討を進めているところである。委員会での検討のほか、ワークショップやアンケートを実施しながら、市民意見を広く収集し、将来ビジョンに反映していく方針である。

今回、多摩市の文化芸術について市民の目線で話し合い、考える機会を作りだすとともに、そこでの市民意見を将来ビジョンに反映することを目的として、市民ワークショップを下記の通り実施したので、結果を報告する。

■実施概要

日 時：令和5年2月18日（土）14：00～16：10

場 所：パルテノン多摩会議室3・4

参加者：一般参加者 18名

多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員 6名

事務局（多摩市文化・生涯学習推進課） 5名

■実施の流れ

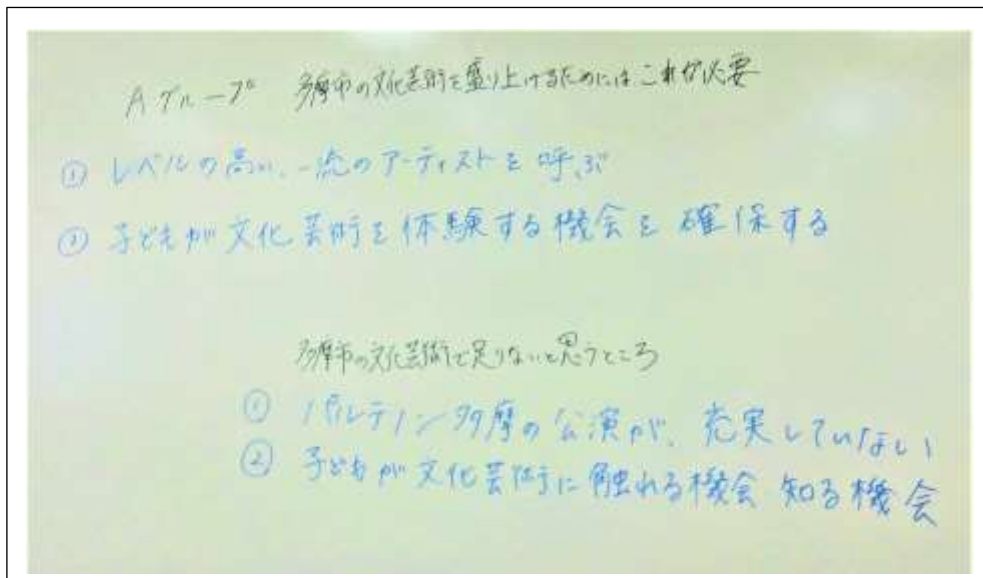
- ① 事務局によるワークショップ実施経緯説明
- ② 多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員長および委員挨拶
- ③ 4グループ（一般参加者と委員で構成）に分かれ、委員の司会で自己紹介と一般参加者の役割分担決め（進行、書記、発表）を実施
- ④ 一般参加者の進行によってグループワーク開始。主なテーマとして、「多摩市の文化芸術で足りないと思うところ」と「多摩市の文化芸術を盛り上げるためには、何が必要かについて」でアイデア出し
- ⑤ アイデアをホワイトボードに記載し、グループごとに発表
- ⑥ 発表後、各グループに配置された委員よりグループごとの講評、その後、委員長より総評し、ワークショップ終了
- ⑦ ワorkshop終了時に、一般参加者に向けたアンケートを実施

■各グループの主な発表内容と講評

※Cグループは、参加者の人数の関係によりEグループと統合したため、参加者なしとする。
 ※発表内容には、ホワイトボードに記載された内容のほか、発表時に口頭で補足された内容も含めて記載する。

Aグループ(参加者4名)

<p>テーマ：多摩市の文化芸術で足りないと思うところ</p> <p>①パルテノン多摩の公演の充実 ⇒実施している公演は入場者が少ない。空いている席は、多摩市民が入りやすい工夫をする等、満席にする努力をする必要がある</p> <p>②子どもが文化芸術に触れる機会、知る機会 ⇒塾や英語などの実用的な習い事で忙しい子どもが多く、授業を通して文化芸術に触れる機会を作るため、学校内で文化芸術活動を行うことやパルテノン多摩実施の事業に招待するなどの機会を作ってはどうか</p>
<p>テーマ：多摩市の文化芸術を盛り上げるためにはこれが必要</p> <p>①レベルの高い、一流のアーティストを呼び ⇒本物の文化芸術に触れることで興味をもつことが必要である。知名度がある人、メディアに出ている有名人を多摩市に呼んで、商業施設も巻き込み、文化芸術を盛り上げていく。</p> <p>②子どもが文化芸術を体験する機会を確保する ⇒お金がかかるものではなく、無料でできるワークショップなどの機会を確保する</p>



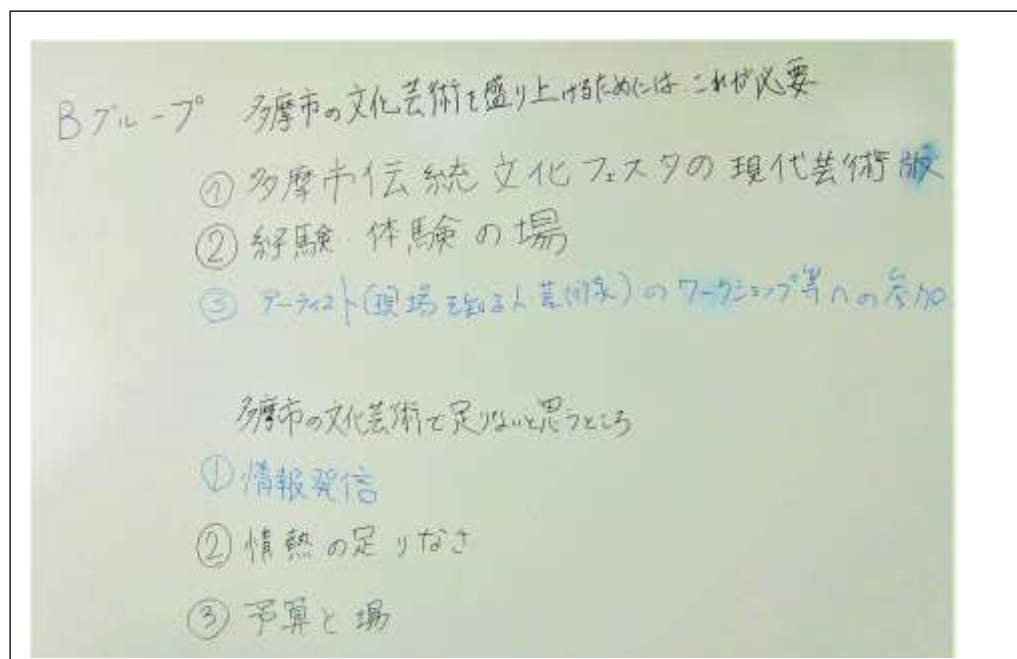
【多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員によるAグループの講評】

Aグループは、全員が偶然にも演奏や表現する側の立場の方であり、表現する「場」の必要性を感じていることや、子どもの頃に出会ったものがそれぞれの今に繋がっている点で共通していた。豊かに生きる、自分らしく生きる、そして地域がもっともっと繋がっていくために、文化芸術が必要であるとの意見であった。子どもからお年寄りまで楽しめるような新しいものを作っていきたい、一流の文化芸術に触

れる機会を増やしていきたい、という情熱に溢れる皆さんの意見をお伺いし、これらの意見を市にどう伝えていくかが委員会の課題であると改めて感じた。

Bグループ(参加者4名)

<p>テーマ：多摩市の文化芸術で足りないと思うところ</p> <p>①情報発信 ②情熱の足りなさ ⇒市民の文化芸術に対する情熱が足りない、行政等の支援への情熱が足りない ③予算と場</p>
<p>テーマ：多摩市の文化芸術を盛り上げるためにはこれが必要</p> <p>①多摩市伝統文化フェスタの現代芸術版 ⇒伝統文化に限らず、J-POP、ピアノ、バレエ、水彩画、舞踊、ダンスなどを多摩市の予算で行う ②経験・体験の場 ③アーティスト（現場を知る人、芸術家）のワークショップ等への参加 ⇒レベルの高いアーティストからセミプロのアーティストまでの様々なアーティストが参加・活躍できる場を作ることで、参加者も様々な触れ合いや体験ができ、場が盛り上げていく</p>

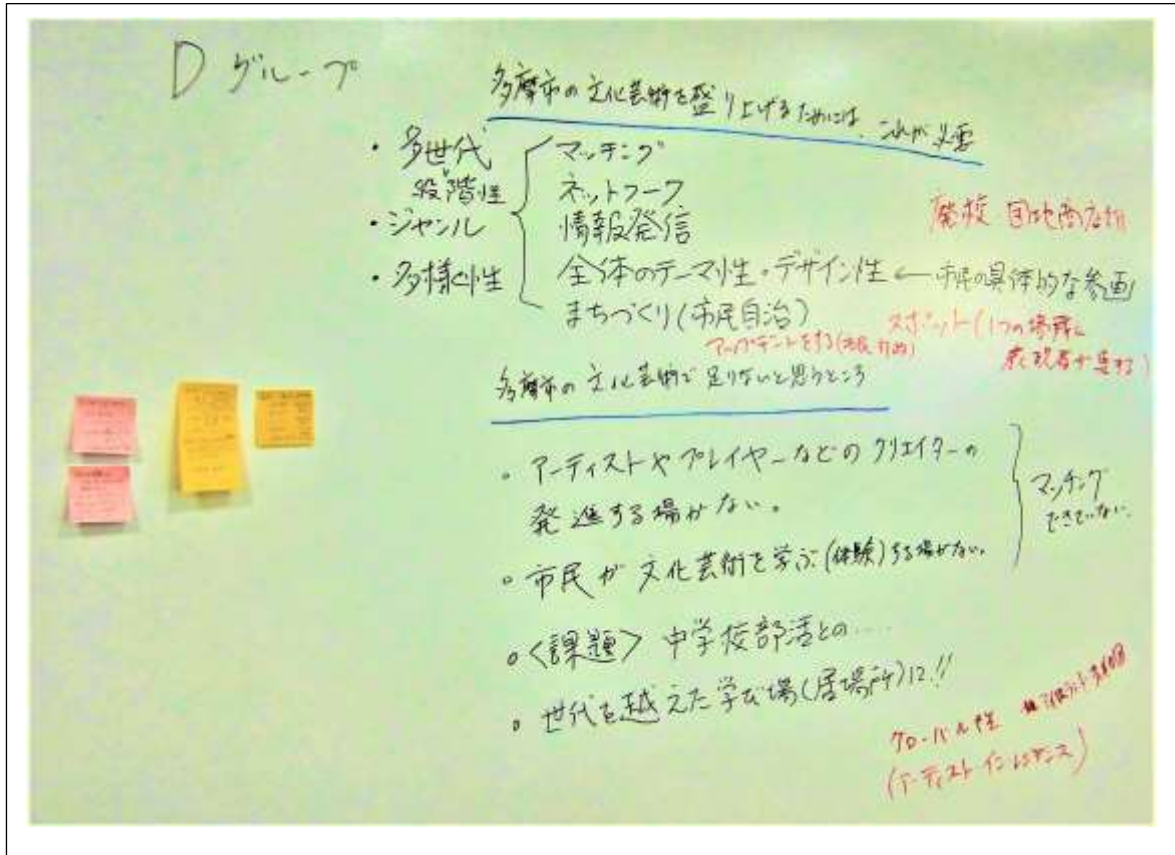


【多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員による Bグループの講評】

Bグループの特徴的なキーワードは「情熱」であった。Bグループで交わされた意見を聞きながら、自身が「興味関心は人それぞれ違うものであり、文化芸術を一般化するのではなく、それぞれが生まれながらに持つ情熱や興味関心をどうしたら表現していけるのか」を考える機会となった。

D グループ(参加者5名)

テーマ：多摩市の文化芸術で足りないと思うところ
①アーティストやプレイヤーなどのクリエイターの発信する場 ⇒パルテノン多摩のギャラリーなどもあるが、料金が高く、ビジネスとして成り立たせるには難しい。
②市民が文化芸術を学ぶ、体験する、鑑賞する場
③①と②のマッチングができていない
④中学校文化部の活動の受け皿 ⇒中学校の部活動が地域に委託されていく流れがある。サッカーなどの運動部は、既に地域にコーチングも含めた担い手がいることが多い。しかし、文化部は学校が関わらなくあった場合に、受け皿はあるのだろうか。廃校や商店街がその受け皿になり得ると思うが、その場所や仕組みが足りていないと考える
⑤世代を超えた学び場・居場所
テーマ：多摩市の文化芸術を盛り上げるためにはこれが必要
①多世代が、様々なジャンルで、多様性をもって関わっていくことが必要 ⇒そのためには、マッチング・ネットワーク・情報発信が重要となる。それを、市民の具体的な参画のもと、まちづくりとして全体のテーマ性・デザイン性をもって進めていくべきである。
②スポット（1つの場所）に表現者が集まり発信する場をつくる ⇒廃校や団地商店街を活用し、クリエイター等が集まったり、カフェなどにしたりして、人が集まるスポットにしてはどうか
③市民と行政の関係性 ⇒市民が中心となって文化芸術でまちをどうするか提案し、それを行政が受け止めていくのが良いのではないか
④外部の人が多摩市に住みたいと思うまちづくり ⇒住環境の快適性や便利だから、という理由だけではなく、カルチャーが根付いているから、という理由で選ばれるまちづくりを目指していくべきではないか
⑤アーティスト・イン・レジデンスの活用 ⇒毎年、海外からアーティストを呼んで一定期間滞在してもらい、アーティスト活動を行ってもらおう。小・中学校の生徒と触れ合い、子ども達にも文化芸術を知る機会となる。多摩市はアイスランド共和国のホストタウンになっているので、アイスランド共和国のアーティストを呼んでもよいのではないか。

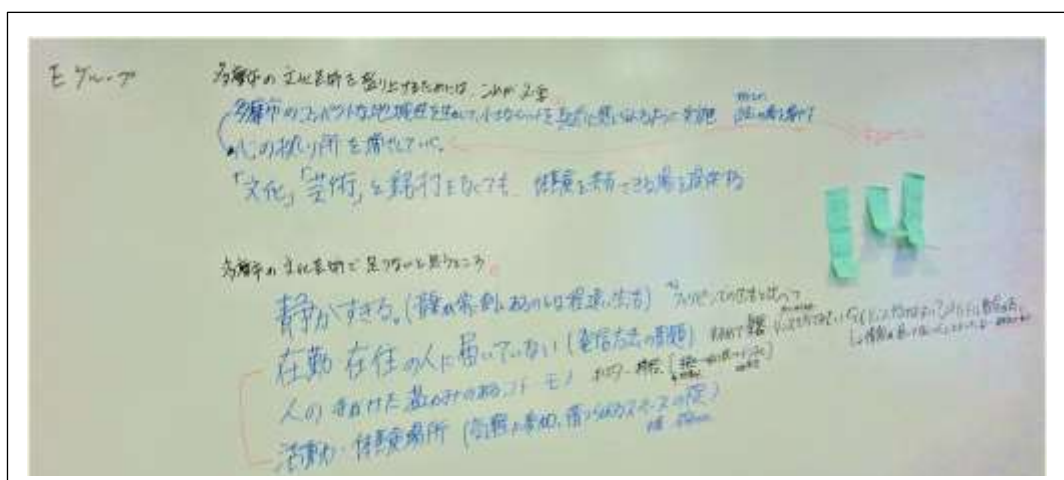


【多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員による D グループの講評】

D グループは、まだまだ時間を使って話していきたいほど、文化芸術の本質的な所を議論していた。市では、文化芸術施策について委員会を立ち上げ、約3年にわたり様々な議論を行ってきた。委員会での議論の内容が本当に正しいのか、判断が難しい時があった。今回のワークショップの意見を聞いて、委員会で話し合ってきたことが間違いではなかったと手ごたえを感じることができた。ワークショップの話し合いの中で、「場」・「継承・育成」・「人権」・「多世代」というワードが出ていたが、まさに委員会での話し合いに通じる言葉であった。令和2・3年度において文化芸術条例について議論してきたが、その中でこだわった点が、多摩市という言葉がなくても、多摩市の条例だとわかるようにしたいということだったが、Dグループの話し合いは、市のブランディングに繋がる「多摩市ってどういう街なのか」、「多摩市の魅力とは何なのか」という視点も含めて、意見交換することができていた。

Eグループ(参加者5)

<p>テーマ：多摩市の文化芸術で足りないと思うところ</p> <p>①静かすぎる（音楽が常に側にある生活とは程遠い）</p> <p>②在勤・在住の人に情報が届いていない（発信方法の問題） ⇒情報を発信しているのかもしれないが、ほしい人に届いていない。例えば、楽器をやってみたい、特定の文化芸術に触れてみたい、と思っても、どこを調べれば良いのかわからない。若者は市ホームページではなく、SNSで情報を得る。発信方法を考えていく必要があるのではないか。</p> <p>③人の手掛けた温かみのあるコト・モノが少ない ⇒周知ポスターや挿絵、画面がデジタルに統一されており冷たい印象があり、手作りならではの温かみのある表現を目にする機会が少なくなっている</p> <p>④活動・体験場所 ⇒気軽に参加、借りられるスペースが不足している。そういう場所があっても料金がかかる、子どもや学生が行きづらいという課題がある。</p>
<p>テーマ：多摩市の文化芸術を盛り上げるためにはこれが必要</p> <p>①多摩市のコンパクトな地域性を生かして、小さなイベントを身近に感じられるように実施 ⇒文化との出会いの場を増やし、心の拠り所を増やしていく（今日みたいなワークショップなど）</p> <p>②「文化」「芸術」と銘打たなくても、体験を共有できる場を提供する</p>



【多摩市文化芸術ビジョン検討委員会委員によるEグループの講評】

Eグループの話し合いで良かった所は、自身の体験から意見を出していた点である。小さい頃に触れた文化芸術のきっかけから、今に繋がっている話がたくさん出てきたので、そこが非常に良かったと思う。市民の文化芸術に触れるきっかけが、いかに街に溢れているかが重要であり、市の施設だけでなく商業施設や街なかなど、身近に体験できる機会を増やしていくことを軸に話し合われていた。

Eグループの話し合いの中で、心に残ったキーワードは、「感じる心ありき」であった。一人で感じてても完結するが、それを誰かに伝えたいと思った時に文化芸術になる、と気づかせていただいた。「感じる」、「伝える」を繰り返していくことは、コミュニケーションに繋がり、まちづくりの基盤になる話であり、この意見も大事にして委員会でも話し合っていきたい。

■多摩市文化芸術ビジョン検討委員会 委員長からの総評

全体を通して印象に残ったキーワードは「情熱」「静かすぎる」の2つであった。「情熱」については、グループ発表や委員からの講評にあった通りである。「静かすぎる」について、どういう意味が含まれているかを考えた時、新型コロナウイルス感染症の影響もあると考えるが、日本は特に共通の趣味等がある仲間同士との交流はするが、その他の人たちと出会い交流する場や、歌ったり踊ったりする機会が減ったように感じる。そういった意味では、重要なキーワードである。

イギリスで、10年ほど前に、政府系のシンクタンクが支援して、70程の研究チームが文化の価値についてレポートを作成した。数多くあるレポートの中で、今回のワークショップの内容とリンクする部分として、「文化の生態系」があったように感じる。文化の生態系とは、いわゆるプロのアーティストや一流の芸術だけでなく、ポピュラーな文化や、アマチュアの文化活動が繋がっており、生態系を成しているという考え方である。その生態系を維持していくことが重要であるとしている。

ワークショップの意見の中で、「場」の問題が出たが、多摩市にあるパルテノン多摩のみで文化芸術の振興を成すものではなく、もっともっと街中に文化芸術があることで、文化の生態系が広がっていくのではないかと考えている。

以上のことも含めて、本日の皆さんの意見は大変参考になった。多摩市文化芸術ビジョン検討委員会で本日の意見、現在実施しているアンケート結果等を踏まえ、文化芸術の将来ビジョンの検討を進め、具体的な形にまとめていきたい。

■ワークショップ終了後アンケートでいただいたご意見

《多摩市文化芸術将来ビジョンに対して期待することや、ご意見、ご提案について》

- ・芸術家の活動の場（場）、芸術にふれる機会とステップアップの道（すそ野）、良質な体験（トップクラス）のかけ合わせと重点化
- ・わかりやすい。動きやすい。気づきやすい。楽しい！！ものを
- ・多摩地域をもっと広域にとらえて、リソースを考えては？市民は多摩市に限定して活動していません
- ・文化芸術については、自分も自分の子にも誰でも（多世代）触れていく場をたくさん提供してほしいです。場づくりにも参加していきたいです
- ・私は一流のプロの演奏にふれて、もっと頑張りたい、という気持ちで続けることができたので、そういう機会があるといいと思います
- ・子ども達に体験してもらおう働きかけを速やかに進めて頂きたい
- ・若者活躍の場や、日本文化など体験の場を増やしてほしい
- ・多摩市の小・中学校の廃校に「多摩市版画村美術館」を設立して頂きたい
- ・地域の中の（公立）教育をアップデートしていきたいなあと僭越ながら考えています。またどこかで学ばせてください
- ・中学校等の文化部活動の地域移行をしっかりと、子ども達のために、居場所のために、自己表現の場を
- ・まずは、市や委員会から発信してください。「待ち」はダメです
- ・行政の方、委員会の方の情熱を感じられるように期待します